

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 19 回 第 6.1 節～第 6.2.2 節

2018 年 10 月 1 日

小 田 勝

最初に、「第 5 章」の補足を 1 点。助動詞「ぬ」について、次のような「…ぬと」は、「いかにも…してしまいそうなほどに」の意を表す。

・目も赤く睨^{にら}みなして、数珠を砕^{くだ}けぬと (=砕ケンバカリ) 揉みちぎりて (宇治 3-4)
思えば、こういう事項が現行の古語辞典・古典文法書で引けないのが不満で、私は本書を作ったのだった。

さて、今回から「第 6 章 肯定・否定」に入る。159 頁、第 6.1 節は「肯定判断」という節の名称だが、用例 (8) 以下は「あり」の解釈の問題である。例えば、次例 (= 本書用例 (9)) の「あらめ」は、文章中の語「隠る」の代用形として、「隠れめ」の意を表している。

・いづくにか来ても 隠れむ隔てたる心のくまの (=心ノ秘密ノ場所ガ) あらばこそ

←
あらめ (=隠レメ) (後拾遺 919)

新刊の『読解のための古典文法教室』では、このような「あり」を「代用形式「あり」と名付けた (48～50 頁、例題 [59] ～ [62])。類例をいくつかあげておく。用例 (8) (9) の類例、

- ・行けばあり (=苦シ) 行かねば 苦ししかすがの渡りに来てぞ思ひたゆたふ (新勅撰 1291)
- ・聞けばあり (=ワビシ) 聞かねば わびし時鳥すべて五月のなからましかば (夫木和歌抄)
- ・木の葉散る山こそあらめ (=サビシカラメ) ひさかたの空なる月も冬ぞ さびしき (続古今 570)
- ・置きそむる露こそあらめ (=秋ヲ知ルラメ) いかにして涙も袖に 秋を知るらん (新後撰 257)

用例 (11) の類例、

- ・あだに散る花見るだにも [美シク] あるものを宝の植ゑ木 (=極楽浄土ノ宝樹ヲ) 思

ひこそやれ（続古今 810）

160 頁用例(14) (15)の類例。

- ・秋こそあれ夏の野辺なる木の葉には露の心の浅くもあるかな（貫之集）<=「秋こそ
[露の心の深く]あれ」>

なお、次のような場合は、「は-こそ」が強調のために「なからめ」の中に割って入ったものであって、「あり」の前に語句が補われるわけではない。

- ・春をへて [除目ノ] 春待ち遠^{とほ}に見ゆるには秋のたのみ（=頼ミノ田ノ実）のなくはこそ
そあらめ（=ナイダロウ）（元輔集）

161 頁用例(23)は、初刷・第2刷で「二人は同じてて。」とあったものを、第3刷で「二人は同じ^{てて}父。」とした。

さて、以上のように「あり」の上の補訳ということが考えられるわけであるが、ここで改めて、古典文解釈上注意される「補訳」にはどのようなものがあるか、本書から抜き出してみよう。これには様々なものが考えられるが、例えば、次のような事項があげられようか（頁数は、本書での説明の開始頁を示す）。

①格を表す助詞の補訳

- a 格助詞の非表示（「搦取 ゆ、また鯛 ゆ持て来たり。」土佐）→367 頁、399 頁。
- b 格の内包（「この野は盗人 あなり」伊勢 12）→397 頁。
- c 「への」の意の「の」（「少将の返事」落窪）→333 頁。

②並列の助詞の補訳（「青柳 ゆ 梅との花を折りかざし」万 821）→361 頁。

③「なり」の上の補訳（「折りて ゆなりけり」古今 37）→83 頁。

④「あり」の上の補訳、補充→159 頁、417 頁。

⑤連用修飾語の補訳（「いと恐ろしきまで ゆ見ゆ」源・紅葉賀）→289 頁。

⑥連体修飾・主名詞間の補訳（「幼き御後見」源・若紫）→322 頁。

⑦原因推量の「らむ」「けむ」における疑問語補訳→198 頁、201 頁。

⑧意志の意の補訳→144 頁、221 頁。

⑨陳述副詞の呼応語の補訳→307 頁。

⑩飛躍のある条件文の補訳（「春雨の降らば ゆ思ひの消えもせで」後撰 66 詞書）→546 頁。

⑪反実仮想の前件・後件の補訳→206 頁。

⑫結びの補訳（「ひが耳にや ゆ。」源・若紫）→254 頁、444 頁。

⑬準体言への体言の補充→337 頁。

⑭換喩の展開、場所名詞・方向名詞・情報名詞化など→312 頁、314 頁。

ほかに、言うまでもなく⑮「主語・補語などの明示」や⑯「反語や「だに」などの表現への本意の補足」などもある。このようなことは古典文の解釈にあたって誰しも行っていることであるが、補訳がどのような根拠に基づいてなされるのかを自覚することは、古典文解釈法を確立する上で大切なことである。逆に言えば、古典文解釈に当たって、正統な根拠無く、勝手に語句を補ってはいけない、ということでもある。

本書第6章の「6.2.1 ず」に移る。162頁の2つ目の◆で、「新全集の説」としたのは間違いではないが、論文では山口佳紀(1998)がある。

「6.2.2 否定のスコープ」の165頁、用例(5)(6)の類例をあげる。

- ・[仏ヲ] 身を捨てて恋ひぬ心ぞ憂かりける岩にも生ふる松はある世に(新勅撰 603)
- ・五月雨に渡りいそがむ広瀬川まさらば波の袖漬かぬまに(沙弥蓮愉集) <「[まさらば波の袖漬か]ぬ>

同頁◆の類例、

- ・このこと(=落葉宮ト夕霧ノ結婚ハ)、いと切にあらぬことなり(=全ク無益ナコトデアル)。(源・夕霧) <律師→一条御息所>

修飾語と否定とについて、

- ・太郎は花子のように歌わない。

は、「太郎も花子も歌わない」意と、「太郎は花子と異なる歌い方で歌う」意との両義がある。次例第1例は前者、第2例は後者の構造である。

- ・人の心は面のごとく同じからざることにて侍れば(野守鏡)
- ・親のやうに子は思はぬ習ひなれば(保元・古活字本)

次例は、無い無い続きであるが、結局そういう「宿」があるのである。

- ・松もなく池もあせぬる宿なれば風も音なく月も影なし(安法法師集) <暴風雨ノ見舞イニ対スル返歌>

ふと、森山卓郎(2000:105)が示した、「昔々、ある所にお爺さんとお婆さんがいませんでした。」という異様な文を思い出す。

[出典追加] 安法法師集①安法法師(989年生存)③新大系 28/野守鏡②1295年③日本歌学大系 4

[引用文献追加] 森山卓郎 2000『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房/山口佳紀 1998「古事記歌謡の古語性について」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』